



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 575 回 探し物は「時間泥棒」

2014.5.4

ドイツの作家ミヒャエル・エンデの童話『モモ』、ご存知の方多いと思う。

ローマを思わせるとある街に現れた、「時間貯蓄銀行」と称する灰色の男たちによって、人々から時間が盗まれてしまい、皆の心から余裕が消えてしまう。しかし貧しくとも友人の話に耳を傾け、その人自身をとりもどさせてくれる不思議な力を持つ少女モモが、冒険のなかで奪われた時間を取り戻すというストーリー、時間泥棒の話である。

いつも何か探している人がいる。「探し物」は時間泥棒であると思った。

探し物のベスト5は、携帯電話、家の鍵、車のキー、書類、眼鏡・サングラスだそう。

これら探し物に費やす時間を調べると、驚愕の結果が分る。

文字通り「塵も積もれば山となる」で、改めて整理・整頓の大切さを痛感する。

民間の保険会社がイギリスで成人男女 3,000 人を対象に行った調査がある。

探し物をする回数は平均で 1 日 9 回、探し物にかかる平均時間は 1 日 10 分。

成人人生の 3,680 時間、実に 153 日間を探し物に費やしているという、驚きの数字になる。

文房具メーカー「コクヨ」の調査でも、平均的なビジネスマンは、年間 150 時間を探し物に費やしている。こちらはイギリスの調査の倍以上の時間である。

一日の就労時間を 8 時間として考えると、年間約 19 日間何かを探している。

また別の調査で、日本のサラリーマンの平均年収を 440 万とすれば、私達のコストは 1 分当たり 40 円になるそう。仮に、就業時間中の探し物時間が 150 時間だとすれば、私達は 1 年間に 36 万円も付加価値を産まない、無駄な経費として会社に負担させていることになる。その社員が 100 人いたら 3,600 万円。もしこの 100 人が探し物の時間を無くす事ができれば、3,600 万円分、会社に貢献できることになるかもしれない。

もう少し、屁理屈を進めよう。

この 36 万円分の時間を、家に帰って自己啓発の時間に充てたとする。

36 万円分自分のために投資することができ、36 万円分の本を読み、そこから自分にとって大切な気付きが得られれば、本当に価値のある事になるはずだ。

時間換算にすると、1 か月の実働日数を 20 日として考えると 1 年間で 240 日。一日当たり大よそ 35 分の時間を作れる事になる。35 分あれば、何かしらの自己啓発が可能である。

仕事ができる人は、探す時間の無駄を認識している。道具を探している時間は、新たな付加価値を産み出さない。付加価値を産まぬ時間はゼロにせよ！…

本当に貴重で、有益な時間の使い方を説いた童話『モモ』だが、天邪鬼気味の小生のこと、やや飛躍したが、童話『モモ』から、こんなことを学んだような気がした。